

2026.3
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみや 富
やく 薬

3号

第48巻
No.440



アブラナ *Brassica rapa* L. var. *oleifera* DC.

アブラナ科 (*Cruciferae*)

生薬 ナタネ油(菜種油) 種子を粉碎、蒸熱して圧搾する。

成分 脂肪酸：oleic acid, linoleic acid, α -linolenic acid, palmitic acid, stearic acid 等。

効能 軟膏、硬膏、リニメント剤などの製剤用基剤。

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



菜の花や月は東に日は西に 蕪村

安永3年(1774年)、蕪村が、現在の神戸市灘区にある六甲山地の摩耶山を訪れたときの句です。菜の花の時期、西の空に夕日が沈むころ、空は茜色、摩耶山から見下ろす一面の黄色い菜の花、同時に見える月と太陽、目の前に大きなパノラマが開けた壮大な景色がうかびます。菜の花が咲いている時期で、東に満月、西に夕日が見えるのは、今の暦で4月20-25日(旧暦の3月10-15日)頃のことです。シーボルトの『江戸参府紀行』にも、彼が文政9年(1826)の春、長崎から江戸へ向かう途中、船で過ぎた瀬戸内海沿岸や、播州室の津から大坂までの陸路の途中などで目にした菜の花畑の美しい光景が、感動を込めて繰返し描かれています。今では全国各地で観光用に植えられ春の風物詩となっています。

ナタネ油は『第十八改正日本薬局方』(2021)ではアブラナとセイヨウアブラナ(*B. napus*)の種子から得た脂肪油と定められています。

スカンジナビア半島からコーカサス地方ならびにシベリアに至る地域でその野生種が見出され、これらの地域が原産地と推測されています。シベリア経由で中国には紀元前に既に伝播し、日本には5世紀後半頃(450年頃)には伝来し、飛鳥時代(592-710)には食用野菜として使われていました。

越年草で、根は肥大せず、冬期葉はロゼット状になり、翌春高さ1m前後の茎を上げ、上部で分枝します。下部葉の基部は茎を多少とも抱きます。上部の茎葉は無柄で葉身は幅広く、基部はやや大きく広がり茎を完全に抱き、葉質は柔らかい。4月頃、茎頭に総状花序を立てますが、花序内の個々の花の間隔が狭く、花が重なって見えます。鮮黄色の十字状花を密集してつけ、花が終わってから円柱形で、先端に長くちばし状突起をもった長角果を生じます。花序内での長角果の不稔が起こり易いことや、種子数も12~26個と少ないこと、種子が比較的小さいことに、茎の分枝が少ないことなどを加味すると、収量が多い種ではありません。現在は採油用の栽培はほとんどなく、菜花としての栽培が主体です。

もう一種のセイヨウアブラナはアブラナとキャベツ(*B. oleracea*)の自然交雑種で、両種の共通分布地域のヨーロッパ大西洋沿岸地域を起源としています。18世紀後半にはスウェーデンからイギリスに導入され、北アメリカに伝わり、近年ではカナダが一大産地になっています。よく分枝し、多くの長角果を付ける多収性種であり、含油率も40%と多いことから日本に導入された1886年以降またたく間に栽培面積を独占するようになりました。始めは灯明油として使われることが多かったのですが、次第に石油を用いたランプ等にとって代われ、反対に食用としての価値が高くなり、使用が増えて行きます。しかし、ナタネ油中に過剰摂取すると心臓障害を起こすと言われるエルカ酸を40%も含有し、過剰摂取すると甲状腺障害を起こすと言われるグルコシノレートを含んでいることからアメリカでは食用が禁止されていました。1974年にこれら2成分を抑えた品種がカナダで開発され、産地の名をとって「キャノーラ種」と名づけられ、需要が増大しました。

アブラナとの相違点は草丈が1.6m以上と大型であること、分枝も多く、側枝の広がりも大きいこと、節間が長く、茎は無毛で太くなります。葉身の基部側は羽状に切れ込み、基部は茎を抱きます。上部葉は無柄で、やや大きく広がり茎を抱き、ロウ状物質に覆われて裏面は白っぽく見え、質はやや硬く革質的。花茎が伸長しながら開花するため、花序内の個々の花の間隔が空きます。花序内での長角果の不稔は極めて少なく、種子数も多く、通常は一莢に20-36個含み、種子も大きく多収です。

(村上守一 記)